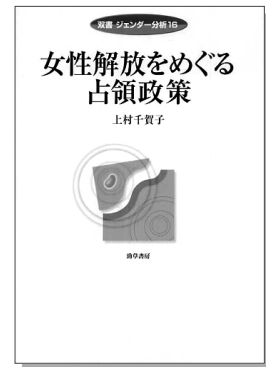


上村千賀子

## 女性解放をめぐる占領政策

(2007 勁草書房 262P 3,300円+税)



赤松良子

私たちの憲法の、男女平等条項が、終戦直後に年若いアメリカ女性によって草案が書かれ、それが今日の日本女性の地位や活躍にとって大変大きな寄与をしていることは、広く知られている。その人は、ニューヨークに住むベアテ・シロタ・ゴードンで、80歳を超えてなおしばしば日本を訪れ、日本の女性の権利と幸福のためにいかに闘ったかを語ってやまない。そして、彼女の自伝が読まれ、映画『ベアテの贈りもの』が全国各地で上映されていることもあって、彼女の名は感謝をもって長く記憶されることであろう。

彼女が勤務していた連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）には、同じ頃、相当数の女性職員が働いており、女性政策の主たる担い手として、日本女性の地位の向上に並々ならぬ貢献をしていた。しかし、半世紀以上を経た現在、彼女たちの存在は歴史の霧の中に消えていこうとしている。だが、彼女たちの功績は、ベアテ・シロタ・ゴードンのものに比しても決して劣るものではない。より具体的に、よりすみずみにまで、その成果は及んだのである。そして、彼女たちに共感し、協力をして、ともに働いた日本の女性、つまり、私たちの先輩たちが存在していた。その代表的存在として、日米女性の「女性政策推進ネットワーク」があった。これらの歴史的事実にスポットライトを当て、彼女たちの業績をうかがいあがらせてくれる重厚な研究書が、世に出た。上村千賀子『女性解放をめぐる占領政策』がそれである。

著者は、東京大学社会学研究科で博士課程を終えて、国立婦人教育会館（現・国立女性教育会館）に20年近く勤務した後、群馬大学教授として生涯学習・ジェンダー専攻の学究であった（現在、国立女性教育会館客員研究員）。戦後占領下での女性政策に関心を抱き、その主体として活躍した担当官たちにインタビューを試み、その過程で大きな感銘を受け、以来長きにわたって史料の掘り出しと執筆へのエネルギーの源にしたことが察せられる。そのインタビューが1991年に開始されたとき、ご高齢になられた担当官たちが数名ご存命でおられたことは、著者にとっても私たちにとっても幸いだったと思う。同様のことは、ネット

ワークの日本側メンバーだった方がご存命だったことについても言えることであろう。

残念なのは、本書の中のスターといえるエセル・ウィード中尉が70年代に鬼籍に入られており、著者は直接お会いする機会を得られなかったことかもしれない。私自身は、彼女が活躍していたころ、津田塾専門学校の学生で、藤田たき先生（ネットワークで協力された模様が本書のなかでうかがえる）などから、ウィードの名を聞いた気がするし、労働省婦人少年局に入ったときの課長補佐だった富田展子氏が、かのウィード中尉のアシスタントだったと知り（本書31ページに写真）、大いに興味を抱いた。その後、1963年にニューヨークへ行った際、East and West Book Storeを経営していたEthel（そのときは、ファーストネームで呼べた）を訪問。翌年4月に再訪したときには、彼女の共同経営者で従姉の女性と3人で、ミュージカル『ウエストサイド・ストーリー』を見て、夕食までご馳走になった。それとても、彼女が日本で働いていた頃のことを懐かしく思い、自分のまいた種がどうなったかを知りたいとの思いから、私にまで親切にしてくれたのだと思う。1971年初夏に、婦人少年局長になっておられた高橋（富田）展子氏が彼女を局長室に招いたとき、私は婦人課長として同席したが、アメリカの婦人局よりも人員も権限も大きくなっていることを喜んでおられたように記憶している。それから間もなく逝去されたと聞き、高橋展子氏が局長在任中に、再訪日が実現したことは、ご両者にとって本当によかったと、今でもうれしく思っている。

著者が感銘を受けたと書かれているヘレン・ホスプ・シーマンズ氏たちの「占領期の滞日経験は人生のハイライト」「使命感をもって仕事をした」という感想（あとがき）は、まさにウィード氏のものでもあったと私は確信できる。

本書は、大きく2部に分かれ、第I部では、第2次世界大戦中に成立したアメリカ陸軍女性部隊（WAC）と、その中で育ったエセル・ウィード中尉、彼女が日本の女性の地位向上をめざして、日本の女性リーダーたちと協力して形成した「女性政策推進ネットワーク」の活動の評価、その成果

の1つである婦人少年局の労働省内設置、ウィード中尉の考えに影響を与えたアメリカの歴史学者メアリー・ピーアードの思想と行動について分析を行ない、女性解放をめぐる占領政策の特質を明らかにしている。

第Ⅱ部では、占領下の女性教育の問題に焦点をあて、とりわけ男女共学と女性の特性教育問題についての、GHQの女性たち（アイリーン・ドノヴァン大尉や先述のヘレン・ホスプ、ルル・ホームズ博士ほか）と文部省（当時）との攻防や妥協の過程が、著者の掘り起こした史料に基づいて詳述されている。

全編を通じて、戦後の女性政策を進めた力を、日米女性の国境をこえ、立場をこえたsisterhoodであったと語っている。それがあつたればこそ、当時のアメリカの実相をこえ、GHQの上層部の方針をもこえた女性解放をすすめることができたのだと評価する。

そして、著者自身がインタビューに応じてくれたヘレン・ホスプ・シーマン博士に言った「あなた方がおやりになったことを歴史の記録に書きとどめるよう努力します」との約束を、見事に果たされたのである。

（あかまつ・りょうこ 元労働省婦人少年局長・元文部大臣）